



2950

小書  
不白

圖書印

印也

梅の枝と云ふもどれぬ處に  
鶯も亦あつて己が首梅  
梅さくまは戸をくひり  
木は自ら年乃初花園の梅  
高きと云先記つ事 船が  
年越し山路もたよりなき  
言ふ世の人乃何と云は  
立海の舟も山より舟の  
年越て来れり 春庭  
空け色も朝顔少く 風



明くはぬしとらふまは乃初  
筑波山今也木は乃まの  
まは乃さるやうひりあ  
年乃花笑うしち袖を初  
あててさ春のそりあ  
まは一日敷也今乃八重  
色はさるまはとひり  
時立れま風ゆりま初  
あててさるまは乃ま  
園入やあててさるま  
谷も乃初まは乃ま  
山也高初まは乃初

かにさるまは乃初  
豊乃乃初まは乃初  
まは乃初まは乃初  
奥に父の末初まは乃初

若菜

山松乃初まは乃初  
摘あててさるまは乃初  
根は乃初まは乃初  
水乃初まは乃初  
根は乃初まは乃初

七種もつとろふ世をば枝水  
ふあてふはけりや、世のつら  
種一あまの摘取も枝水  
とくか、神もつらふ葉水  
翁のひ孫ふあふはけりや  
家くつはけりや、あまの葉水  
つと神も大芥うとふあふは  
りくはけりや、摘取も葉水  
りくはけりや、七種の葉水  
一りくはけりや、世の種  
若葉つとけりや、あまの葉水  
野もつとけりや、あまの葉水

摘人の心も水の母の根行  
あまのけりや、世の種水  
世もつとけりや、あまの葉水  
根行つとけりや、あまの葉水  
入神もけりや、あまの葉水

子日

あまのけりや、子日、あまの葉水  
風もつとけりや、あまの葉水  
あまのけりや、子日、あまの葉水  
あまのけりや、子日、あまの葉水  
あまのけりや、子日、あまの葉水

玉葉松のひんぎんぎんぎん  
色にのこるんをみてる子日松  
年くは子日あつと葉木  
松るさ海いあつ海乃子日松  
ひそせん松上袖も子日松  
つるあつ松けしひんぎん松  
今日ひんぎん世はの松  
この松まつを松子日松  
當も松色いひんぎん松  
簾まけしひんぎん松  
白妙松をみてる子日松  
松りぬ本草しけし子日松

かゝぬやらは子日松  
引のせは又は乃松子日  
子日松は松葉の松  
若葉まつし松子日松  
子日せん母もつし松松  
老るも子日松の松  
松の海は松もつし松  
引るんは松の松  
引るんは松の松  
子日松は松の松  
子日松は松の松  
子日松は松の松

雪中梅

梅の香は雪の白さより白く  
雪の山の上は梅の枝は  
雪の梅香は少く玉の光  
梅の香は雪の上の白さより  
梅の香は雪の白さより白く

水色梅

山も梅も水も清く水は  
水も梅も水も清く水は  
水も梅も水も清く水は  
水も梅も水も清く水は

五

梅の香は水の色より白く  
梅の香は水の色より白く  
梅の香は水の色より白く  
梅の香は水の色より白く

梅

梅の香は水の色より白く  
梅の香は水の色より白く  
梅の香は水の色より白く  
梅の香は水の色より白く

梅もや仍あひひきて珠の如  
梅くいさるふの風乃言ふ事  
年いふささやと此木宿梅  
ころりて珠く梅の白く  
去年笑し花さく梅盛  
木より生ん梅や中三葉  
梅さくひひとさく形さ  
ぬらふ此所の名や梅云  
一花乃梅もあきて山さ  
梅の香も遠く同本陰  
巖より花さく梅の古木  
梅柳あひひお生れ香

梅笑て遠山まじ本間  
苗れあふ梅  
さきさくり梅  
本花香あふ  
心しまお不ぬ梅  
袖の香も三枝も  
香もさくさく人  
梅花もさくあふ  
ひれあふ人  
管乃やさく梅  
梅もやさく唐乃  
善少くさく梅



梅の香あまうん秋乃千種  
あらやけいふぬ梅の白ひ  
末と成りかへん初花也園の梅  
梅くくく梅風乃枝うれ  
袖乃多やみらるる人の着梅  
梅くく木の下のとくし袖ひか  
何人とも本は梅乃花の着  
去るらりし梅も去る枯木  
梅くく遠くくくくく  
じりくくくくくくくく  
毒花草木は梅乃花の着  
梅乃花乃方く枝くく白ひ

く里の白ひくく梅花  
かこぬく梅乃花の着  
香うくく人年と古木乃梅  
去年乃くく古えくく  
傳へく梅くくく木くく  
くくくく梅くくくく  
く人乃梅くくく麻乃  
じりくくくくく人乃香  
梅一本四方乃くく家風  
毒花乃代くくくく香  
梅くくくくくの枝く  
乃乃梅くくくくく

あゝ一世に枝枯し梅は  
なまふく木に白く梅の花

お北野會所元二日

あけのぼしとく、あけのぼし梅  
梅とて草木にふくあけの  
根よりあけのぼしとくあけの梅

山荘

空に年あふ松やあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし松

あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘  
あけのぼしあけのぼし山荘

水邊露

あけのぼしあけのぼし山荘

朝霞をみかたの海平流  
あかしの水とてくま川  
おろす舟をよる藤乃海へ  
塩もや煙もよるおき  
月も白く霞もうらやま  
山あそび川に流るひかり  
船着山や大江の舟川  
江の勢もよるおき  
うきうきとておき下もよる水  
うきうきとておき下もよる水  
波乃もよるおき下もよる水  
ワのえうや松におき舟の勢

大うきとて水乃細流也朝霞  
塩や引奥へおきみかたの勢

かきこむ松も松も小松乃末  
一りもよるおき下もよる水  
おき下もよるおき下もよる水  
朝のくせ白くうらやま  
おき下もよるおき下もよる水  
おき下もよるおき下もよる水  
おき下もよるおき下もよる水  
おき下もよるおき下もよる水



梅柳香もよきなりし秋の香  
素の香れあはれと松の香り  
松乃もあはれぬ香れはるばる  
竹の葉乃も素に清しき年々香  
素は白も染れと雪乃下り素  
かよひ日ひんもくもく香  
月代や乃乃の藤の葉乃雪  
花とまら人もあはれ心も香  
白雪は葉もみなり乃もあは  
れ乃のゆききん乃ちあはれ  
素乃香乃乃也海乃雪乃山  
と乃乃まは清乃乃乃乃乃

海草乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
若草乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
かよひ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

賞

えのひ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
明乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
賞乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
百乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
賞乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
あな乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

鶯乃耳に志くう太今年水  
うひを先もり勢にけく蛙水

氷道柳

松花の枝結あまこも柳の風  
こりか記の志つえうこも柳の  
系氷のせくや下えれ川柳  
枝多しうこもあま川柳  
柳原結乃袖やこも柳の  
く柱枝のしうも河柳  
風や山と柳のこも柳の  
池氷乃の雪りーあま柳の

あまの柳の枝結あま  
雪柳乃のせくや下えれ川柳  
浪のこも柳のこも柳の  
下葉のしうも河柳  
糸ついで流る枝乃河柳  
河柳のこも柳のこも柳の  
う風乃吹あけし枝乃柳  
梢のこも柳のこも柳の

柳

あまの柳の枝結あま  
雪柳乃の木間分んこも柳の

春柳の吹くころは 春風  
庭の草も毛皮のくさる柳の  
吹くころは 風乃柳の  
吹くころは 風乃柳の  
枝がうらやましくも折る  
露のさすあひさし柳の  
水と木と柳の葉もま  
瑠璃のく風乃多う柳の  
涼みうらうら柳の  
あひさし柳の葉もま  
門くくも柳のこころ  
の踏し泣くや古柳

まらたけの枝とあはれ柳の  
の袖と柳の下のえさ  
目うらひくま柳の  
のうら柳のとま乃内つ風  
一りあ柳のし門ちまこ  
春のあはれなる国の柳の  
の袖とま柳乃木陰の  
一本に柳もあはれ枝の

氷

若草はまらたけの氷  
まらたけの氷はまらたけの氷

首乃く急ましくも雪の如く氷  
あられりて汀のまじりたる水  
流の急き源の急き心氷の  
解るる氷の海に白く舞  
去日山と水乃下、泉の

雁

雁の月と唐との勢い  
雁乃く急ましくも雪の如く氷  
あられりて汀のまじりたる水  
流の急き源の急き心氷の  
解るる氷の海に白く舞  
去日山と水乃下、泉の

二月

山也雪也心乃月也神乃  
才王にまはる月も何れも  
月出まの心新なる言わ  
入と名も存も有の乃心  
春は秋乃月も其也を津風  
新くも山乃月乃の玉流  
秋の月乃新き乃の秋  
まら山心しうも中も  
山と神乃心も其也月乃  
おぼろも其也心も其也  
月也船と棹川乃心



春は花も有る月も有る  
心はよの月も有る  
霞つゝ有る月も有る  
子心は入る月も有る  
春は花も有る月も有る  
春は花も有る月も有る  
春は花も有る月も有る  
春は花も有る月も有る

蕨

山人乃て紙よりある蕨哉

待花

花も有る月も有る  
花も有る月も有る  
花も有る月も有る  
花も有る月も有る

お花

春は花も有る月も有る  
春は花も有る月も有る  
春は花も有る月も有る  
春は花も有る月も有る

雨中花



花盛都乃知とありて  
ちりては山とて花とて

### 山花

春とて花とて山とて  
花の山は山の端とて  
くく山とて山とて  
里くく山とて山とて  
山は山とて山とて  
花とて山とて山とて  
山とて山とて山とて  
山とて山とて山とて

九重は花とて山とて  
山とて山とて山とて

### 名所花

九重は花とて山とて  
山とて山とて山とて  
山とて山とて山とて  
山とて山とて山とて  
山とて山とて山とて  
山とて山とて山とて  
山とて山とて山とて  
山とて山とて山とて

年と八分とそん家乃花也

### 水邊花

瀧のうた花より下りて花  
春は淡乃清くり水邊  
春はあけの花乃水  
花に水せよとらへて  
らへて下りて花乃水  
池水乃底より花乃水  
流の上を流るる花乃水  
わたりて花乃水  
遠山乃花也舟乃水

吹乃花也あけの花乃水

### 野花

一のうた花乃水  
陰のうた花乃水  
春は野の花乃水  
鹿乃水花乃水

### 咲花

空のうた咲つて花乃水  
下枝のうた咲つて花乃水  
朽木のうた咲つて花乃水

山嶺より花の一本は  
根を海に花を川に  
白ひより山を花を浦の浪  
らうりよ花をうりん  
常盤木より花をうりん

花の記

おらあ世に花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本

人花より花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本  
花の一本は花の一本

花









生れく花園ひらく是れは  
遠近もなるといふは

### 山櫻

玉之影のあはれも山櫻  
おとよびの山櫻の家の  
秋やぬきにいそむる山櫻  
白雲にまじりてまはる山櫻  
久しうの昔の夜も山櫻  
見よ人のあつた山櫻  
春もなるといふ山櫻  
関山も山櫻の影も

胡弓のひびく山櫻

山櫻うらなまの山櫻

海にまじりて山櫻

おとよびの山櫻

おとよびの山櫻

山櫻の影も山櫻

山櫻の影も山櫻

山櫻の影も山櫻

山櫻の影も山櫻

山櫻の影も山櫻

山櫻の影も山櫻

山櫻の影も山櫻

山櫻の影も山櫻



苗代

苗代乃水山ひりこ油  
引きおれおりの植栽の考

春雨

春雨の勢もまよひりこ油  
春雨も本城の丸の形也  
海も海も海も海も海も  
春雨も本城の丸の形也  
春雨も本城の丸の形也  
春雨も本城の丸の形也

楳

葉のれ山くや、葉の玉楳

若草

春草もいまも水も海も  
晴しくおれおりの若草も  
若草も海も海も海も海も  
春の日の下草の丸の形也  
若草も海も海も海も海も  
若草も海も海も海も海も  
若草も海も海も海も海も



嗟乃何の初本言一松は藤  
菴と云ふやあまし本木の玉威  
本と云ひたりてまの枝所藤松  
松と云ふ枝所藤松と云ふ  
菴と云ふいこしてまの枝所藤松  
菴と云ふいこしてまの枝所藤松  
松のまの枝所藤松と云ふ

桃

来く世林く一松はの桃  
年くくおる終る本園の桃

款冬

や西少の松乃まくくは松

暮春

のまの松乃まくくは松

雜春

秋や西少の松乃まくくは松  
萌出てしは松乃まくくは松  
際や西少の松乃まくくは松  
来く代年しは松乃まくくは松

氷乃下筋のうらまは  
浪をこし氷を折るまは  
秋の色はまじり山は松が  
しらをうり山田やせとまは  
川のうらまはゆるゆる春の氷  
朝露は海にぬるまは  
山川乃らりり耕はうらまは  
秋をこしうらまは秋は  
松風のまは秋はうらまは  
まはうらまは秋はうらまは  
駒乃踏踏やうらまは  
海はうらまは海はうらまは

春はうらまは海はうらまは  
たあうらまはうらまは園は  
まはうらまはうらまは海は  
海乃うらまはうらまは  
松はうらまはうらまは  
まはうらまは秋の水はうらまは  
春の色はうらまはうらまは  
まはうらまはうらまは海は  
まはうらまはうらまは海は  
まはうらまはうらまは海は  
まはうらまはうらまは海は  
まはうらまはうらまは海は

権前よりつれづれと神の御  
あつさう春の野山と云ふ  
湊入乃船のまうらや春風  
雲の人の袖乃らそよ縫鳥  
涌出くゆきやいそよまはら  
初袖もさやあさひのまはら  
根え枯てまにち紫花鳥  
八隅ある世をまはらむ  
舟人や公乃らうらと春風  
まわつる年たをまはらむ  
茶の本もまはらむ  
舟人もまはらむ

一りの松もまはらむ  
岩乃水や山の春風  
古くもまはらむ

更衣

面影もまはらむ  
衣衣もまはらむ  
今日の人をまはらむ  
衣衣もまはらむ

新樹

衣衣もまはらむ





とさく木はつる葉は油に太此  
木枯乃根成るより葉葉が  
成りうふ木葉も葉の板ひき  
まひのあひまをり木葉の板ひき  
根入も成るまをり木葉は  
葉のひて成るも木葉の庭  
花なりうふらん風乃て葉が  
花よりうふ風と成りうふ  
常盤木もまひるも葉の  
まをりうふ明山乃て葉が  
成りうふ木葉も一板ひき  
夏山乃成りうふ花の板ひき

十一

成りうふ木葉も葉の板ひき  
花の色もまをり葉の板ひき  
成りうふ木葉も葉の板ひき  
まをりうふ木葉も葉の板ひき  
海山もまをりうふ木葉の板ひき  
見も木葉も葉の板ひき  
病葉の板ひき  
成りうふ木葉も葉の板ひき  
成りうふ木葉も葉の板ひき

所花

卯花や水と志くぬ流つ浪  
卯花乃たまき世らりや  
うらなう卯まぬ月乃結ぶ  
卯花の志る志く根は本流  
卯花や雪れし山乃春の庭

郭公

卯花のうらなう物言し  
卯乃たまき卯のあつ  
卯人の山乃たまき一郭公  
まぬ卯のうらなう卯花結ぶ  
卯花のうらなう卯花の子親

卯花のうらなう卯花の郭公  
卯花のうらなう卯花の子親  
卯花のうらなう卯花の郭公  
卯花のうらなう卯花の子親  
卯花のうらなう卯花の郭公  
卯花のうらなう卯花の子親  
卯花のうらなう卯花の郭公  
卯花のうらなう卯花の子親  
卯花のうらなう卯花の郭公  
卯花のうらなう卯花の子親

つとむるそや人宿の時  
月夜まよひきりて  
ひーひきりて  
月もまよひきりて  
人宿るもあそび  
時を不慮に  
妻のあはれ  
夏来りて  
ゆき人乃宿る  
草花宿る人  
のあはれ  
まよひきりて

時を不慮に  
ひきりて  
月もまよひ  
旅りて  
旅人乃宿る  
海中に  
人宿るも  
あはれ  
時を不慮に  
妻のあはれ  
夏来りて  
ゆき人乃宿る  
草花宿る人  
のあはれ  
まよひきりて



引跡を又悔さうくん菅苗  
糸屋乃程重なりあやも  
水

早苗

朔夜乃素紫にあやもあ苗  
よる田うりまて水た  
水  
子苗より汀を山乃みら  
水  
月におおさうじつら田はあ苗  
水  
芦の葉むく苗うく  
水  
秋風とて入て初てあ苗  
水  
玉鉾乃乃くとりあ田草  
水  
りて入し流也新川苗乃魚

萍より入ては悔し早苗水  
うりてと田をうけの境  
水ありまを末つら入はなり  
水  
あひつら心流むく苗乃素紫  
水  
まあまん麻の葉あ苗  
水  
夏山乃山くひまはれ門田  
水  
一とら早苗をあらはれ水  
水  
あつたは田乃うらへ田水  
水  
たひり守るあ苗に近し梅の  
水  
あ田より水さう風を新川  
水  
あつらあ田をたぢる水  
水  
国よりあうりあ田草

池水、言方其早苗の根下  
に、苗とひらきをうねる

吉梅

あは梅の夢ふらふあは梅の

五月雨

五月雨、川端をぬる  
五月雨、山と水は  
五月雨、晴ては川  
五月雨、松の上  
五月雨、友を

五月雨、遠山を  
五月雨、晴ては川  
五月雨、又なる川  
五月雨、川を  
五月雨、中くは  
五月雨、台も入  
五月雨、はらう  
五月雨、やまの  
五月雨、なま  
五月雨、あつ  
五月雨、雲井  
五月雨、つら

五月ぬれあつて雨あつて  
花のとう梅まはらう梅はぬ  
五月ぬれやま井たらの初  
五月雨乃晴るきく川邊  
五月ぬれ松乃枯り一溪舟  
五月ぬれ雲山く言方の林麻  
五月ぬれ都乃うらとす川  
五月ぬれ川上やう海入る  
五月ぬれ山うぬま板屋  
五月ぬれやううに鎮の月  
五月ぬれあつて沖上溪川  
五月ぬれ洞きうぬら台

五月ぬれ河はぬるあつて  
白く下葉をしく梅の雨  
五月ぬれ源少くあつて  
五月雨干涸やあつて  
五月ぬれ川よとくあつて  
五月雨を都もたう梅  
五月ぬれとあつて梅の上  
五月ぬれとあつて梅の上

標

あつて梅乃枯りあつて  
出りたう水りあつて





花の根よりなる長野乃草葉  
若草は毒色よりぬる草  
夜草乃根とも刃まの穂が  
三乃種刃とも蓬れ後り草

若竹

あまの山は風もこころの園竹  
口まよりうり根ぬる園竹  
冬よりありまも刃の竹  
まも刃の後りは言一園の竹  
麻の中は蓬の物う園乃竹  
面をれすもある竹乃草葉

竹乃草也毒をぬる草のぬ  
干草の陰刃し初る草葉  
今年草のうらまも園の竹  
まも刃の竹は言一園の竹  
刃の刃の陰後りう入門乃松

菅

菅草は水草は海より水  
菅は水草も水乃竹の  
草は水草は水乃菅草  
いさよふ草は水乃菅草  
風乃竹も草も水乃菅草

夕べの雲霞はうららかに霞  
明る野もさびしくひかす  
とふ雲のまにまにうららかに霞  
風さけの袖うつらめり  
をたつてさきゆくあはれ  
天のけり玉の堀りて霞  
と津のまに霞をりて霞  
飛雲起りて霞の  
空らしく霞をりて霞  
あてはるる霞をりて霞  
神垣乃のまに霞をりて霞  
草花原とふ霞をりて霞

山之まに霞をりて霞  
西乃日夕のまに霞をりて霞  
空に水あはれ霞をりて霞  
水底のまに霞をりて霞

夏月

若葉の川に霞をりて霞  
月よの霞をりて霞  
夏月  
八景のまに霞をりて霞  
夏月

新しき一月のうらみは川  
山は雲をまつてぬきや夏  
月すしあけや清く成る  
友の秋の月もみか引具清  
月と槐の舟涼し和風  
月乃うらみ入すしは橋の上  
かひきけり庭の本も秋の月  
うらみよとや夏も秋も  
開く秋の月もや人も  
お入し月もや舟も  
涼しあはれ涼しうらみ  
夏はうらみ涼しとて秋も

月乃て秋とては川  
夏は秋の月もや人も  
さうも秋も涼しとて秋も  
うらみよとや夏も秋も  
開く秋の月もや人も  
入し月も涼しとて秋も  
うらみよとや夏も秋も  
入し月も涼しとて秋も  
うらみよとや夏も秋も  
入し月も涼しとて秋も  
うらみよとや夏も秋も



夕立のあつた嵐のふらふら

石竹

種一あまの年になき石竹  
岩とともある也遠山石竹  
花とともあや初乃石竹

常夏

陰少く世は常夏にふれ松  
摘てまき山を極る所の昔  
花くこの程は年少くは花

夕顔

夕つかたあつた月乃日乃

蟬

破のいほ川蟬見や松乃想  
可蟬乃かきまぬあま  
空蟬のいほ中らうも蟬

蓮

風の上は露は草乃之葉  
露とあつた草をなす  
涼みはあつた蓮の

廟

あまのまはりのけしきも  
袖のうらにまはるる風  
水も色も入るる所  
詠まはるる風  
四方に吹く風  
風もまはるる山  
まはるるの風

泉

山もまはるる泉も流る

海もまはるる泉も流る  
まはるる泉も流る  
遠山もまはるる泉も  
まはるる泉も流る  
まはるる泉も流る  
道もまはるる泉も流る  
夕風もまはるる泉も  
まはるる泉も流る  
家もまはるる泉も流る  
まはるる泉も流る



すゝたて橋板のこゝろ  
海一あの隣あのみよか  
しゝゝふきぬまゝ  
立すゝ海苔地の船  
立しゝ木あまきと松  
海一たて定ちあま  
しゝゝあまきと松  
すゝゝあまきと松川  
汐神ゝあまきと松  
あゝあまきと松  
海一あまきと松  
しゝゝあまきと松

海一たてあまきと松  
すゝゝあまきと松  
海一たてあまきと松  
立しゝ木あまきと松  
山氷ゝあまきと松  
しゝゝあまきと松  
立しゝ木あまきと松  
山氷ゝあまきと松

清水

しゝゝあまきと松  
奥ゝあまきと松  
しゝゝあまきと松



弦ひらりやち水柳陰  
波はしるるわがにけるるる  
勢きひらり弦ひらり海なる清き水  
ひらりひらり人給えたる清き水  
汲人乃の然たる世の清き水  
あたらしく弦ひらり清き水  
夏日はひらり水乃の清き水

御萩

多き出ん夏日は清き水  
多きああらせかひらり清き水  
よきき記書や公乃清き水行

年いへる御萩のて清き水  
か清き水乃の公乃清き水  
はらるる麻之林乃の清き水  
清き水乃の清き水乃の清き水

雜夏

咲く花乃の清き水乃の清き水  
清き水乃の清き水乃の清き水  
夕白くもあらるる清き水乃の清き水  
清き水乃の清き水乃の清き水  
清き水乃の清き水乃の清き水  
清き水乃の清き水乃の清き水  
清き水乃の清き水乃の清き水

一葉ら連て舟に月夜を渡る  
水底に夜を枯らつて松の  
川流乃末葉やみよる松松  
かきくはる程や及木は遠の勢  
見よ目にはかきくはる程  
峰近し一軒の下我を松去  
水世月也沖中川を去り流  
苔地の多き少く一及松を  
玉の舟乃とまはる山のか  
却之山水たたり一夏乃夏  
おとせしとまはる松の枝  
花をけし水けの葉を流る

紫の葉乃ひらく近し松の  
桐の葉乃ひらく近し松の  
夏山に雲にひらきそ流る  
まろく紫木は遠の勢  
去りてまはる松の葉  
山乃ももそかたり也及海  
花に松あつたまはる玉の松  
夏月も陰をたつる面出  
あきくはる松の葉  
及日乃森と木枝の風  
去りて松の葉を流る  
及り今し松の葉を流る

ふもらん古殺し後新の落  
平雲のとう橋乃夏に伊約山  
夏成入ハソウサカヒ也特成  
カコアツト記洋の記  
夏海也ま夏の山本中の露  
夏とてせらるる夏林乃水  
こま事して海山ら一特の風  
夏の日也焼く二十年海の松  
年少とてこころ後一葉成  
夏雨晴てしやら木陰  
つくとて洋をひらき遊川  
水音月やたるとて特例の海

風かりの父やあ乃花山  
夏成也新とてまの秋  
とて木成海成山  
伊約乃記ハ夏成木陰  
岩根水も木成乃成  
中く一夏なるあり特す  
夏成事とて一別成  
海山を隔あり一夏成  
あとなら山も一夏成  
夏山のうら白とて一夏成  
夏山也ま年一夏成  
大嶽やソウサカヒ成初山

夏山也常之乃て暮りか  
立氷も何れも後へ此柳陰  
氷雪存た少くもあつた流氷  
冬は秋と少くもあつた夏は  
夏に於て其世思ふん大山  
如きもあつた氷うへ夏山  
夏山也遠くよりいふか  
暮らして後かまき其世思  
夏は秋はははは起あつた  
秋は冬と真うへく柳氷  
流氷もあつた氷うへ水  
秋うへく秋うへく風うへく

夏山の嶺も氷乃入江か  
夏山もあつた花も清川  
流氷もあつた氷うへ夏  
夏山もあつた氷うへ夏  
秋は秋のあつた枯れ夏  
夏山もあつた氷うへ夏  
花もあつた氷うへ夏  
常盤木もあつた氷うへ夏

初秋

秋の日に一葉斗花の宿れ





溪風也山流と入秋の夢  
太山也と云ふらん秋は秋  
秋乃秋山下山也溪つふ  
秋の夢は夢と云ふらん秋の  
秋乃秋山下山也溪つふ  
秋の夢は夢と云ふらん秋の  
秋乃秋山下山也溪つふ

活

久きや公乃と云はるる  
夢は夢と云ふらん秋は秋

花乃花と云ふらん秋は秋  
宿乃宿と云ふらん秋は秋  
月乃月と云ふらん秋は秋  
溪乃溪と云ふらん秋は秋  
月乃月と云ふらん秋は秋  
月乃月と云ふらん秋は秋  
月乃月と云ふらん秋は秋  
月乃月と云ふらん秋は秋

野分

野分と云ふらん秋は秋  
年乃年と云ふらん秋は秋  
野乃野と云ふらん秋は秋





霧のうら水戸のうら水  
見ゆ人もとれぬ中を秋の霧

女郎花

をふくし見ゆ水戸のうら水  
誰袖をよきとてあはれ

霧

朝霧はまふくはるす  
かゝるも霧もさ人の林  
ゆくるも霧はうらなる川  
川霧は霧の上ゆあはれ

朝霧は山はあつひか  
夕霧はみゆふおとと  
吹多そ霧はあつくせ川  
ゆりのこもさかひ霧  
朝霧はまふくはるす  
朝霧はまふくはるす  
あつ霧は山はあつひか  
朝霧の川霧もあはれ  
朝霧に松風もさかひ  
霧のうら水はあはれ  
霧のうら水はあはれ  
あつ霧は海もあはれ

うひつたは溪谷や芳に海舟  
の氷とある川芳は流るる  
杖勢や侍やじ母の香  
浪をうへ芳やのやせ朝花  
山の端と中より芳なる  
勢のやう山やうへと村  
川を芳にうへうへ  
と山らしも先方川袖と芳  
朝芳に芳と平みうへ  
うへけてのやう白と芳  
さ山山くすも芳と芳に  
舟みらば芳人や芳と芳の松

朝芳はあひく総也泊舟  
勢のやう川せのやう水は  
袖とまて川芳やう船渡り  
船日然と芳のやう芳  
芳時て朝日と芳木葉  
まうとれ流の芳と芳松  
橋はうと芳のやう芳  
鴻くくと芳と芳  
芳時て中より芳なる  
あう芳はうと芳  
芳とれと舟の芳と芳  
勢晴く川流るる芳



胡白之摩より定ぬ花野水  
咲つてそへく其花は千種水  
ちぬる也ふと心花野水  
時より花はくまへ一花の海  
うと花はくまへ一花の海  
送三井寺色海系三花  
南都の無の千白才一  
多海の袖ふみさ乃花野水

蘭

芳一花はくまへ一花の海

水色月

浪白一花はくまへ一花の海  
月より川芳より花の海  
萍也汀乃月花の雲  
山水一花はくまへ一花の海  
月より花はくまへ一花の海  
月より花はくまへ一花の海  
月より花はくまへ一花の海  
月より花はくまへ一花の海  
月より花はくまへ一花の海  
月より花はくまへ一花の海

鳥也舟又寄つては海乃海  
波も初海も老月は千歳川  
故の松木も老月も有秋  
夕有秋入迄老月も有秋

山月

夕暮と曉月乃まう秋  
初は山乃瑞乃まう秋  
山くも月も老月も有秋  
山のもたのひも有秋  
入方た山山も有月も有  
月清くも有月も有

初くもま川也白川の月有秋  
山くも月乃うらも有秋  
山乃瑞乃月也まう秋  
月も有月も有月も有  
明くも月も有月も有  
入と有月也有月も有

月

たのあわも有月も有  
秋乃月有秋も有月も有  
中におるも有月も有  
雲に入月有月も有



松うらも月あふまらひの波  
たれくしなもまきらの葉の  
入るるてきまのあけのまき  
まりしうらまのあけのまき  
初月たのまのあけのまき  
秋風の吹入るまのあけの  
鏡乃の筆入るまのあけの  
有明や日あまのあけのま  
とせうらまのあけのま  
夕月南のまのあけのま  
本乃のまのあけのま  
月乃のまのあけのま

有明のまのあけのま  
今とてまのあけのま  
虧るまのあけのま  
浮雲に初まのあけのま  
まのあけのま  
眼あまのあけのま  
園あまのあけのま  
浣るまのあけのま  
月とあけのま  
秋のまのあけのま  
入るまのあけのま  
秋乃のまのあけのま





九月十三日

何の世のあやにまゝに秋月  
をまじりて影をさす  
月こころひそかに  
有明の光をさす  
日さす方角をさす  
花をさす  
あはれぬ影をさす

鳴

川鳴と鳥鳴と

雁

雁の影をさす  
雁の影をさす  
雁の影をさす  
雁の影をさす  
雁の影をさす  
雁の影をさす  
雁の影をさす  
雁の影をさす

鹿

鹿の影をさす  
鹿の影をさす  
鹿の影をさす  
鹿の影をさす  
鹿の影をさす  
鹿の影をさす  
鹿の影をさす  
鹿の影をさす

鹿の毛は洗や約る春の  
山吹の海をくま端山  
春の少麻はるきう笑山  
お栗の鹿乃ききん  
鳴方心はあまの  
麻の毛とらち花初  
鹿乃毛とらち花初

礎

空のひく礎は月乃人  
里と秋の山と礎え  
秋乃初うらうら

鵲

鵲啼て初芳ら  
鵲啼く山里は  
初や文徳はく美

紅葉

花あそびお葉を  
白ひかひらう  
お葉くまのあ  
あらうあ  
梅や秋の葉は

も此の命の事也林と源緑  
の林と公はとらんお葉も  
一葉と中心にしろく下葉  
うしろに本葉をみるお葉は  
初秋はしろく山をみる本葉  
梅乃西の朝の末に梅は水  
らまきとあつあつれんお葉  
の梅とあつあつれんお葉  
年とあつあつれんお葉  
神乃門のあつあつれんお葉  
お葉にけけお葉とれんお葉  
常盤木も水とあつあつれんお葉

錦よりあつあつれんお葉  
風乃つら紅葉もあつあつれんお葉  
あつあつれんお葉  
色あつあつれんお葉  
後士とあつあつれんお葉  
世の人、風とあつあつれんお葉  
秋はつら紅葉もあつあつれんお葉  
月流てあつあつれんお葉  
初あつあつれんお葉  
あつあつれんお葉  
あつあつれんお葉

山紅葉

甲子年心止袖之人出乃紅葉  
お葉よ生てつの中葉は松  
海に色を山流れを流紅葉  
太山本れをてし流海海  
時海より山流れを流紅葉  
秋のころ山風きぬ海流  
ころけお葉中乃山流れ  
妙平しお葉お葉山流れ  
香水と結つてお葉山流れ  
秋もやうん袖の紅葉

川水乃多る紅葉も流紅葉  
ゆ人や錦を本れ山下風  
ころのや袖の紅葉  
山をてつて紅葉も流紅葉  
くをてつて紅葉も流紅葉  
秋山の紅葉の解乃紅葉  
秋の野を流れ山の紅葉  
ころけお葉山流れ紅葉  
お葉もてつて山流れ  
月日へ山流れ紅葉  
深山の紅葉も流紅葉  
紅葉も山流れ紅葉

山くたの葉成池乃提くれ

菊

千世乃くはれり也白菊海の  
花の後くはれり也白菊海の  
菊海を根くはれり也白菊海の  
白菊は花くはれり也白菊海の  
仙人也くはれり也白菊海の  
此菊也くはれり也白菊海の  
根くはれり也白菊海の  
菊くはれり也白菊海の  
一枝乃菊也くはれり也白菊海の

若水乃白くはれり也白菊海の  
木くはれり也白菊海の  
松くはれり也白菊海の  
赤遠くはれり也白菊海の  
菊は水くはれり也白菊海の  
くはれり也白菊海の  
菊の中くはれり也白菊海の  
菊の海くはれり也白菊海の  
菊の海くはれり也白菊海の  
仙人乃世けくはれり也白菊海の  
此菊の海くはれり也白菊海の  
付くはれり也白菊海の

かゝるも松にお生れ菊乃を  
山ぬまや菊のあを菊の花  
湖八年少菊乃をくふ  
さけいさ理りくきくは花  
く心秋の後松くー菊水  
松の花さやらーし菊の  
うらさく八世ー見之菊

秋田

時ぬりくく松乃菊さ  
梅の目れもさくー菊の  
松ひくさくさく出と時

秋乃松乃菊と白松の時

秋田

梅の秋乃菊さくーくたの  
さくーくゆさあひはさの  
山晴てりくさくから菊  
刈治く水と干町乃山  
さくーくは苗代さく刈田  
さくぬく水さくさく刈田  
かさく刈田さくの菊  
さく柳も秋乃菊さく田  
稲並れ松乃菊さく早田

ほろろしき草花をえりし山田  
稲葉つじ庭に小池をたがふ  
秋乃らるる久しかりし家  
山田を言井に安ひく稲葉  
ふくむとれとふまひのた  
里くくくくみいおまらるる  
神垣のふくくくくく田畑  
刈込はひくくくく稲葉

九月盡

竹林のふくくくくく  
林とくくくくく山田

松の葉やうくくくく

雑林

くくくくくやーりくく山  
一本と枝の千種乃園生か  
林乃くくくくくく  
山くくくくくの端乃現く  
きくくくくくくく  
山水くくくくく  
くくくくくくくく  
樹のくくくくく  
山松林くくくく

秋の暮らさるる秋の色は  
秋の月と暮れは雲の  
風は秋のふゆりぬ袖の  
暮れはふゆりぬ袖の  
正徳のやうに風流の海  
力に山も夕陽風の  
みづは入江の谷は秋の  
稲妻はさるる所も  
秋も山も夕陽風の  
雄風のもも入江の  
野は秋の生れはさるる  
入江の秋は暮れはさるる

江の秋は暮れはさるる  
暮れはさるる秋の色は  
うらやまの秋はさるる  
西の山も夕陽風の  
世は秋の暮れはさるる  
分は秋の暮れはさるる  
忍は秋の暮れはさるる  
秋はさるる秋の色は  
秋の暮れはさるる  
灯は秋の暮れはさるる  
秋の暮れはさるる  
あつは秋の暮れはさるる



多く山中に在る一松の松  
林凡々名山とあり記載す  
松の葉を多くて草木は  
出らぬむよふも松の葉  
香山人と云くたきや山  
山くまじくせみ水城等し

冬時雨

松乃葉時雨てかくあり  
岩は松時雨とありじひ  
ぬきくと松や一本むし  
ゆきくと時雨と首乃ゆか

ゆきくと袖かしく時雨  
人かきくもくもくし  
時雨もつきて暮るは松  
松ももくもくもくもく  
松乃くもくもくもくもく  
越の雪都くもくもくもく  
ゆきくとまき松屋の松  
ゆきくと同や松乃くもく  
宿松くもくもくもくもく  
さ松時雨とあり松乃く  
雲は松とあり松乃くもく  
おきくもくもく松乃く

まけり流月や公乃こ来内  
松の葉と山つゝあや影さく樹  
初月乃流や小念れく内  
うそ無ふ月影とささ秋内  
月うそ時影やさのあ  
まきて力丸向は月さく時  
物事そりし袖や宿あつ内  
ゆつとや松さきすりこ秋内  
時ぬ来て月と心月来は出  
時ぬえたり記う記と小枝  
つとく此常盤木乃さ時  
さ宿乃人かへさ一秋内

うそ無ふ月影とささ秋内  
まけり流月や公乃こ来内

霜

吹とつと橋や霜葉の  
霜白一月も材方り川  
風霜乃さ秋木乃さ端  
らさき無うはく霜の  
霜又宿乃のりくさ  
霜乃花乃さくさ  
霜乃海乃橋乃園乃  
霜乃霜乃ひてめら

霜の花をよひてささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし

落葉

橋より霜をささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし

朝霧に霜をささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし  
おのれ乃昔もささげし

蘇心お葉も風とく相  
お葉もたぐりまはる心けり  
吹のりまはる首のり下葉  
そまはる心本葉も水たを  
葉もまはる心お葉の葉  
山もまはる葉も葉の葉  
おらし心まはる心お葉  
お葉も下枝やう中ま  
お葉も丹あく一本葉  
下氷のり心葉分心ら  
人もまはる心お葉  
さうま月も葉も本葉

五十一

年強てと同辺の心本葉  
朽葉のりあう心葉も  
枝も本葉も海山下風  
枝も葉も朽本心けり  
本葉も心お葉も山  
心お葉も下まはる心  
お葉も花あう心本葉  
らまはる心お葉のり  
本葉もまはる心本葉  
本のりまはる心朽葉  
心まはる心本葉  
月もまはる心本葉

残菊

残菊二年遠  
ちあうそく  
本は白菊の  
をうめ笑う

本枯

用乃あそく  
中じも  
本枯乃あ  
本枯千里

七十五

こころは  
本枯や日  
こころは

冬月

雪はけり  
雪はけり  
雪はけり  
雪はけり  
雪はけり  
雪はけり  
雪はけり  
雪はけり  
雪はけり  
雪はけり

河海来り山乃端近し  
光あきも氷のこし  
雪あきく遠山く  
月さゆり色なき  
大江山より下り  
本枯乃月入日  
さきさき  
雲みらるる  
世の人乃を  
月乃約奥中川や

霰

新也あき  
山は雲の太山也  
さきさき  
常らるる  
さきさき

雲

さきさき  
枯の葉は

山雪

さきさき



行人乃宿也。お葉一葉其雪  
山紫花。お成つとてく却りか  
却之と昔のし。雪の山  
雪暗く遠鳴う。冬之水  
去る乃。雪と来共泊ふ  
雪。まじり。雪のうら。雪の  
雪

雪

雪。花菊。咲つて。園生  
一本。どう人。引。い。雪。結。氷  
雪。明。て。冬。日。あ。ら。う。雪  
り。之。一。本。の。雪。は。花。の。雪

掃。も。よ。泣。き。と。雪。は。雪。也  
初。雪。は。消。る。れ。お。雪。は。雪。の  
春。ら。う。と。雪。乃。結。き。く。川。水  
雪。は。と。雪。の。雪。は。雪。の。雪  
雪。も。う。と。雪。の。雪。は。雪。の。雪  
雪。も。う。と。雪。の。雪。は。雪。の。雪  
道。た。い。れ。し。と。雪。の。雪。は。雪  
雪。も。う。と。雪。の。雪。は。雪。の。雪  
初。雪。は。雪。の。雪。は。雪。の。雪  
雪。も。う。と。雪。の。雪。は。雪。の。雪  
雪。も。う。と。雪。の。雪。は。雪。の。雪  
雪。も。う。と。雪。の。雪。は。雪。の。雪



馬の食へし内丸を食行  
月夜を眺まるといふ  
神楽をうらむといふ  
勢よく入るに生を食松  
常より枯れぬを乃うと  
雲はまきて風を園入都  
年くくともあはれむ  
妻もたて若妻の清くあ  
多の遠く根を食を食  
遠海に若妻を食を食  
好妻や若妻を食を食  
馬鹿といひつゝ若妻の  
食

うら若くくかき食乃松の  
家へもつとつと若く食  
よふ人乃つとつと若く  
喜ふれ板を食の若く食  
花を食し若妻を食を食  
若く食を食つとつと若  
晴海を食つとつと若  
若く食を食つとつと若  
民は若く食を食つとつ  
あつとつと若く食を食  
んを食つとつと若く食

高きくはしんをみる影水  
袖巻きてしんをたき下系  
乃とちらうこつあつて  
去りあつたつひ乃高女  
明りのこもわはつりて  
とつちとつちまこつち  
船はあつたつち高女  
松陰のあつたつち高女  
庭面はつち高女  
稲葉はつち高女  
とつち高女  
明日山し起るるる雲軒

高き松初ありて庭松  
皆高き高き也  
戸山共は埋まらるる高女  
して見上月あつたつち  
今たあつたつち高女  
松風乃高き高女  
明りて高女  
高女  
高女  
高女

高女



石川や玉をみけりて水  
く心底に印しぬあはれ  
の印やとこそぬ昔の船  
月入て川つら白く氷  
く袖に白くてけり板舟  
急に流しゆく也より  
汀より流しゆく也より  
舟は流しゆく也より  
民乃たれらるひん  
萍やまつて氷乃う  
氷海に氷たたく川  
川風の音も入るる

瀬の音も入るる  
水鳥

水鳥

夕年を水乃とけり氷  
とけり水乃とけり氷  
水乃とけり水乃とけり  
立海は月乃とけり水  
塩風や流しゆく也  
とけり水乃とけり氷  
水乃とけり水乃とけり  
水乃とけり水乃とけり  
水乃とけり水乃とけり

妻所へもかきつる所 漢の  
友にへもかきつる所 漢の鳥

神樂

新に起つる人 神樂  
さね神樂をいふ言ふは  
久し酒に起つる言ふは神樂  
此よりある人乃た神樂  
明あつる舞の言ふは神樂  
里人之言ふ言ふは神樂

早梅

春の山に花をいふは早梅  
少年とて花をいふは早梅  
冬に花をいふは早梅  
春に花をいふは早梅  
菊の香をいふは早梅  
冬に花をいふは早梅  
梅の花をいふは早梅  
春に花をいふは早梅  
梅の花をいふは早梅

歳暮

春の山に花をいふは早梅

其の節に一葉たたりん年々  
あつた人多く可なり此の葉  
幾年とくく今より此の松  
行方未定限ある年乃言  
可代をへても此の人ん此の葉  
有る此の葉をくくくくく  
此の葉をくくくくくくくくく  
此の葉をくくくくくくくくく

雜冬

吹つくと端山に幸り一風松  
若松乃多し生るる松形  
草垣の月く此の松は柳水

力れ初葉あつた心そ此の葉  
此の葉をくくくくくくくくく  
枯一辺乃木あるさ此の葉  
常盤木此の根あつた心そ此の葉  
冬あつた枝葉のみさ木此の葉  
末つた木をくくくくくく山  
石間や冬に根深さ木此の葉  
冬半春を飾りて此の葉  
此の葉をくくくくくくくくく  
冬に松の葉をくくくくくく  
年々入て松の葉を枯野の  
冬をくくくくくくくくく

夏草とむしよ人の心もさす  
常盤木此中やみぬく老樹  
年乃肉のちりまきさる一松の  
冬も建ん心もさるんま乃花  
老木さる冬もさるぬ松の  
ま約く松やう心もまは  
葉も木も冬もさる松の  
冬もさる大山もさる松  
冬山乃さる一松の本末  
松の色松一しか松の  
冬ま日のちりぬ松の  
まはまて一本もさる松

石よりよ松出れま冬  
うこい人山乃海乃年  
花乃ま約とむしよ  
枯一松も木も春も  
冬枯乃末たのち老木  
とま袖乃色も香も



Handwritten text in a cursive script, likely Chinese characters, spanning across the gutter of the book. The text is written in dark ink on aged, yellowed paper. The characters are somewhat faded and difficult to decipher precisely, but appear to be a continuous line of writing.





